

# のデマ宣伝を許すな！

国労中央機関紙  
「国鉄新聞」(1665号)

—組織原則・共闘原則をふみにじり、セクト的利害のみで労働者を欺く反動的野合を弾劾する！—

約一ヶ月半にわたった動労「本部」オルグの大破産の隠蔽として、無責任なダラダラ「オルグ」を、みたび指示した(5/7付電話連絡)「本部」暴力集団と完全に歩調をあわせて、五月七日より千葉の各職場で一斉に開始された国労からの火事場泥棒的組織介入・攻撃は、完全に破産した「本部」暴力集団の日共立きつき路線でしかないとはいえず、断じて許す訳にはいかない。特に「国労も『千葉』へ」なる大見出しで書かれた5/6付国労中央機関紙「国鉄新聞」第一六六五号の内容が、事実無根の完全なデマを書き並べていることを怒りをこめて弾劾するものである。

## デマで労働者はオレとどきない、破産した革マル共破壊者連

その一つに、国労加入希望の組合員に対して「動労千葉の役員・組合員は、『殺してやる』とまで暴言をはき、オドシ、いやがらせをしかけている……」と全くのデッチ上げデマをのせている。考えてもみよ！「本部」暴力集団の暴力的組合引きまわしを正すべくたび重なる暴力・いやがらせに屈せず連日決起しているわが動労千葉の「組合員・役員」が、そのような暴言・オドシをやるなどという事などそもそも前提的にあり得ないのだ。

動労千葉がこれまで、事故・設備改善等の運転保安闘争をはじめ、高齢者対策、遠距離通勤者対策、定数、動乗賃金などあらゆる問題で原則的かつ最も有効な成果を勝ちとり、また三里塚・ジェット闘争にみられるように、自らの労働条件を守り、また社会正義を貫くためにどんなに苦しくとも団結して勝ちぬいてきたという誇るべき闘いの「実績」——われわれの「オルグ」はこの事実だけで充分なのである。

国労本部は、もし「事実」だと強弁するのなら、いつ、どこで、誰が、誰に対してそうしたのかを具体的に書くべきである。その無責任さを現場・生産点の労働者は怒っている。

## 便乗的介入「破壊をバクロー」

また「国鉄新聞」同号はオルグをめぐる「両組合の動向は動力車職場だけでなく現地の他の職場にも影響するもの大きいと判断し」「国労としても積極的に組織オルグを繰りひろげることをきめた」と述べているが、まさに国労現場組合員の「本部」暴力集団のオルグに抗議せよのいわば当然の声を一部日共と右翼指導部が完全に逆転させてセクト的に利用しているのが実態である。しかも「影響する他の職場」への国労本部オルグ実施ではなく、当の「動力車職場へ集中オルグ」というのだから、その口実も支離滅裂と言わなければならない。本当の「統一と団結」を守って闘う者が誰であり、その便乗的介入者が誰であるのかはいまや鮮明である。いか。

また、全く許せない最大のデマは、介入の根拠に、「4・17津田沼襲撃事件」をまさに革マル流のデマであげつらっている点である。「春闘のやま場を控えて暴力事件が発生し、動労千葉の組合員が乗務を拒否して電車の運行が一時ストップする事態までおきた」「(「国鉄新聞」同号)なんと恥知らずなねつ造であろうか!! この一例を見るだけで、動労「本部」暴力集団が苦しまぎれにわめいている「電車百本をとめた中野一派」というデマビラ(動力車新聞・号外14)との完全なる密約ぶりをさらけ出しているのだ。

(そもそも「春闘」をなげだして国労にスト拠点の設定を全面的にあずけたのは誰だ。そして、それをうけたのは誰なのだ!!)

多くの国労組合員の眼の前で、しかも国労津田沼分会役員も多く同席している「三者労働安全衛生委員会」を開催中の津田沼電車区庁舎に白昼、完全武装の百五十名の暴力集団が突然乱入してひき起された「4・17襲撃」のその一部始終の事実経過、そして、乗務員の勤務が動労・国労を問わず完全に大混乱・不可能となる中で、現場の分会・支部は協力してダイヤ確保に最大限の力を尽したのだという事実をも隠蔽して、何故にこのようなデマを書くのか!!

「オルグ」なるものの実態をつぶさに経験してきた多くの現場では、この国労中央方針に一致に反発し、これまで積み上げてきた共闘の信義を重んずべきであるという多くの真面目な組合員の声が届いていない訳はあるまい。そうではないと強弁するのなら、国労中央は、津田沼電車区内での「オルグ」進展状況・分会執行委員会論議・ビラの取り扱い等々がどのようなようになっていのかを実例を上げて記述すべきである。

## 正しい共闘の原則はここ

動力車職場の全ての労働者は団結し、正しい共闘の原則に立ち、共に奮闘しぬいていくようではないか。